新春を迎えて

代表取締役社長
鈴木英介



皆様、新年明けましておめでとうございます。

昨年は東日本大震災に、新潟・福島豪雨、さらには紀伊半島豪雨と、大きな自然災害に見舞われた年でした。震災から九ヶ月以上経つのに、原発事故の収拾はいまだ入り口にあり、原子炉容器内の溶融した核燃料は、回収の目途はおろか、正確な状態さえ解っていません。

マグニチュード九。十メートルを超す津波。原子力発電所の爆発。二万人を超える死者、行方不明者と、まさに記録的な大災害となりました。これは単なる自然災害と言うには余りにも大きな問題を抱えているように見えます。少なくとも津波の予測や、原発の安全の見積もりに至っては甘すぎた予測と言っても言い過ぎではなかったでしょう。原子力の安全は神話であった事、そして、その神話を維持するための様々な「やらせ」や世論誘導が同時に明らかになりました。

今や原子力発電は本当に安いのかが問われていると思います。我々国民に正しい情報が伝えられているのでしょうか。少なくとも大きな物は大きなリスクがある事ははっきりしたのではないでしょうか。

福島県に十基も原発がある事は、私も今回初めて知りました。これは地域では原発銀座と言われる若狭湾に次ぐ数だそうです。そして、福島の次は我が柏崎の七基なのです。結局、作りやすい所に作るのでこのように集中してしまうのでしょう。福島県民も新潟県民もおとなしい県民性だからでしょうか。今回避難区域になっている二十キロとは、柏崎刈羽原発に当てはめると、柏崎市は勿論ですが、長岡市市街地の多くの部分までが入ってしまうのです。

自然災害のリスクを思えば、このような施設は出来るだけ分散した方が良いのは明らかな事であると思います。

さらに原子力発電に投入されている様々な税金、使用済み核燃料の処理費用や解体費用を含めた総費用、そして、万一の場合のリスク負担。私たち企業経営者の考え方では、リスクは数値化できるし、また、しなければならないものなのです。たとえば、原発事故保険のようなものを作って損害を担保する仕組みを作った場合、いくらかかるのかという事です。それをコストに入れていかなければなりません。

しかし、実際にはそのような保険はリスクが高すぎて、世界を見渡しても引き受ける保険会社は存在しないのです。つまり、その意味は火力より安いどころか、とても釣り合わないという事ではないでしょうか。ただ、最先端の原子力技術は、使っていかなければ進歩に乗り遅れてしまうという強迫観念が、国策として原子力発電を推進してきたのです。

また、国内経済では円高株安。ヨーロッパではギリシャから広がった信用不安。ユーロ危機が世界経済に暗い影を落としています。また、アジアではタイの洪水によって、世界の製造業の重要な部分が止まってしまいました。また、中国のバブルの懸念、北朝鮮の政情と核問題。世界は不安要因で満ちているようです。

このような二〇一一年のなかで、数少ない明るい話題がサッカー女子「なでしこジャパン」のワールドカップ優勝でしょうか。王者アメリカをPK戦の末下した、小さなヒロインは多くの日本人に感動を与えたと思います。

私はこのサッカーを見て感心した事があります。それは、なでしこの選手は恐れずにシュートを打つという事です。

シュートを打たなければ点は取れないし勝てないのです。しかし、実際ボールを持って敵のゴールを狙うとき、誰しも「もし外したら」と考えるのではないでしょうか。それより、別の仲間にパスを渡して確実に決めてもらった方が良いのではないか。やはり、逡巡がある時を狙った方が良いのか。やはり、逡巡がある時を狙った方が良いと思います。

様々な思いがその一瞬に起こるはずです。しかし、そこで逡巡していたら時を逸してしまうのです。

実際シュートを打ってゴールに入るのは半分の確率もないでしょう。しかし、シュートしなければ点が取れる事は永遠にないのです。今までの日本のチームはチームプレーの名の元に、いざという時シュートせず、パスばかりを回していた事が多かったように思います。だから、集団競技で勝てなかったのです。

意外と思われる方も居るかもしれませんが、日本が得意としていたものは、体操や、柔道、レスリングなど個人の競技でした。集団戦ではリスクを引き受ける個人がいなければ勝つ事は出来ないのです。

組織と言っても個人の集団です。栄誉は全体が受けても、リスクは結局個人が引き受けるしかないのです。それをせず、集団にリスクを引き受けさせるのは、結局誰も引き受けないのと同じなのです。

リスクは常に存在するものであり、それは誰かが引き受けなければならないものです。行動のある所に失敗があり、そのリスクを克服してこそ、成果を上げる事が出来るのです。

新春にあたり、本年はわが社も各人がリスクを恐れずシュートする、攻撃型チームでありたいと思います。スポーツも経営も相手のある戦いであり、常に思った通りになるわけではありません。

円高株安の環境で、世界の中の日本の経済も、今後ますます厳しさが増してくるでしょう。低成長、もしくはデフレの時代とは全体のパイが縮小する事です。競争が益々激化していく事は明らかです。

しかし、数多くシュートした方が、多くを外したとしても結局は勝つことになるのです。失敗の数は挑戦の数なのです。その挑戦の中からしか勝利をつかむことは出来ないのです。